

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531206

研究課題名(和文) 英語学習意欲のエピソード分析と英語教師教育資料の開発

研究課題名(英文) Use of Motivation Episodes in English Teacher Education

研究代表者

池野 修 (Ikeno, Osamu)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：70294775

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語学習意欲を対象として、(1)「英語学習意欲が変化した経験」のエピソード・データを収集する、(2)その分析を通して英語学習意欲に影響を与える要因に関する理論モデルを構築・精緻化する、(3)エピソード・データ及び理論的モデルを活用した英語教師教育プログラム(教材資料、モデル単元)を構築する、(4)構築したプログラムを実施し、学習者からの評価データを基に成果と課題の検討を行い、修正したプログラムを提案する、という内容を持つ研究である。教師教育における、学習体験の効果的な省察のあり方、経験と理論的知識の統合などの問題を考察するための事例研究とも位置づけられる。

研究成果の概要(英文)：This research is about the use of motivation episodes in teacher education. The researcher first collected and analyzed episode data of motivating/demotivating experiences from Japanese EFL learners and has developed theoretical models of motivating and demotivating factors. These episode data and the models were utilized to develop a program of L2 learning motivation in a teacher education course. In this program, the participants (i) reflect upon selected motivating/demotivating experiences, (ii) share and discuss their reflections in a group, (iii) identify underlying factors, and (iv) deepen their understanding by integrating their reflection with theoretical concepts (e.g., attainment, attribution and self-determination). This case study provides important implications for pre- and in-service English teacher education, in terms of the usefulness of motivation episodes, and more generally in terms of effective ways to promote reflection on language learning experiences.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教師教育 学習意欲 質的データ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、英語学習意欲のエピソード・データを収集し、その背後にある要因を分析することで新たな研究知見を生み出し、それに基づき、英語教師教育のプログラム(学習単元)及び教材を開発・評価するものである。

英語教育学の分野では、「動機付け」に関する研究は盛んに行われてきたが、研究対象は主として「動機(motive)」=「英語(外国語)を勉強する理由」を対象にしたものであり(それは質問紙項目で用いられる「~だから英語を勉強する」という表現に端的に表れている)、必ずしも英語教育実践者が「学習意欲」に関して求めている情報を提供して来たとは言いがたい。それは、実践者の関心は「学習者はどういう理由で英語を勉強しているか」や「英語を勉強する理由と学習成果はどのような関係を持つのか」と言った現在まで研究対象とされてきた問いではなく、「英語学習意欲を高めたり、低下させたりする原因は何か」や「どのような工夫をすれば意欲は高まるのか」などの問いにあるからである。「英語学習動機」ではなく、「英語学習意欲を変化させるもの」に関する研究が必要であるという認識が、本研究の起点の1つとなっている。

また、「英語科教育法」などの大学の教職課程の授業において、「学習意欲」はしばしば扱われるテーマであるが、「内発的/外発的動機付け」「統一的/道具的動機付け」「自己決定理論」などの理論的知識が教授されるアプローチが主流であると考えられる。教職課程を履修する学生により多面的で深い省察を促し、教師教育としての学びを効果的にするために、新たなアプローチと教材が必要であるという認識も本研究の動機となっている。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、従来の英語学習動機づけ研究とは異なる視点から英語学習意欲を解明する試みであり、(A) 関連の学習意欲エピソード(質的データ)の収集・分析を行い、それを通して(B) 学習意欲に影響を与える要因についての理論モデルを構築・精緻化し、また、(C) エピソード・データの分析に基づいた英語教員養成・現職教員研修で活用するための関連資料の作成を通して、研究知見を実践的に活用することを目的としている。

より具体的な目標として、次の6点を設定した。①「英語学習意欲が高まった/低下した経験」に関するエピソードを広範囲に、多様な学習者から収集する。② それらのエピソードを整理するために、「英語学習意欲を左右する要因(motivators of English learning)」の概念的枠組みを構築・精緻化する。③ 注目に値するエピソードを様々な理論的概念を用いて多面的に読み解き、意味づけを行う。④ 教員養成や教員研修で用いる、英語学習意欲について理解を深めるための

資料(日本語及び英語バージョン)を作成する。⑤ 作成した資料を、英語教員養成の授業、現職英語教員研修などで活用する。⑥ 活用成果を評価し、資料を改善する。

(2) 本研究の学術的特徴としては、従来の英語教育学が、「動機」を実証的研究・理論化の対象として来たが、本研究は「意欲を高めるもの/低下させるもの」という別の観点から、主に質的データ(関連エピソードについての記述)を収集し分析することで、英語学習動機づけ研究の発展や研究知見の実践的価値向上に貢献する、という点があげられる。

また、本研究の学術的・実践的意義として、(i)「学習意欲を変化させるもの」という、実践者にとって意義の大きな観点からの研究データが蓄積される、(ii) 英語学習意欲を変化させる要因についての理論的モデルが開発される、(iii) 教員養成、教員研修などで活用できる、教育的に意義の高い資料が作成される、という点をあげることができる。

3. 研究の方法

目的を達成するために、大きく次の6つのステップに従って研究を進めた。

- ① 「第2言語学習動機づけ」や「英語教師教育」に関する先行研究の包括的かつ批判的なレビューを行う。前者に関しては、2006年までの関連研究は研究者がすでにレビューを行っているので、それ以後の研究を対象として分析を行った。
- ② 日本人英語学習者から、「英語学習意欲が高まったとき/低下したとき」に関するエピソードデータを収集する。高校生と大学生から、質的データを質問紙を用いて収集した(エピソード数はおよそ450)。なお、本科研費研究スタートまでに収集していたデータも分析や活用の対象とした。
- ③ グランデッド・セオリーの考え方等も参考にしながら、収集したデータのグルーピングを行い、背後にある要因の特定及び命名(概念生成)を行う。データをうまく整理するための概念的モデルとして、英語学習意欲を高める要因(21)と低下させる要因(12)のモデルを構築・精緻化した。
- ④ エピソード・データ等を材料に、英語教師教育で活用する資料を作成し、「英語学習意欲」の単元案を構築する。収集したエピソードから、省察の対象として価値の高いと考えられるもの50を選択し、英訳するとともに、関連の教師教育用資料(e.g. 英語学習意欲を高める/低下させる要因を整理してまとめた表)を作成した。
- ⑤ 作成した教材及び構想した「英語学習意欲」単元を実践し、評価を行う。開発した実践案及び教材を、実際の英語教員養成の授業(「英語科教育法」)で2012年

に実施し、受講生(21名)からの評価データ(尺度法アンケート, 自由記述 etc.)に基づいて, この実践の成果と課題を明らかにした。

- ⑥ 試行的に実施した英語教師教育実践の評価に基づき, 開発した教授用資料や単元案を修正し, 英語教師教育モデルとして提案する。英語教師教育における英語学習意欲エピソードの活用に関するマニュアルを作成する。

4. 研究成果

(1) 収集した英語学習意欲エピソード・データ(このデータ自体が英語教師教育実践の材料として価値を持っており, 研究成果の一部となる)について, データ総数は500を超えているが, 教師教育において用いるために選んだものの内, 3例を以下に示す。なお, 元々のデータは日本語で書かれたものであるが, 英語教師教育で用いる資料とするため, 研究者が英訳している。

EPI: “When I was a junior high school student, my friend's family welcomed some people from Sacramento for a homestay. I spent about three days together with these guests. I liked English and did well in English tests, so I was excited about this opportunity, and had an expectation that I could surely enjoy talking with them in English. When I met them, however, I did not understand what they were talking about, and I could not put into English what I wanted to say, either. Even when I managed to express my ideas in English after a desperate effort of mental translation, they often did not understand them. It was not pleasant at all. This shocking experience, however, made me ashamed of myself (I thought my English was good), and I also realized that my English needed a lot of improvement. I then decided to study hard so that I would become able to enjoy talking with anyone in the future.”

EP10: “In senior high school, I was the “English guru” among my friends. They came to me for questions and advice. I felt my own value thanks to my English ability, and this further enhanced my motivation to study harder, all the more because I did not do well in other subjects.”

EP41: “I wanted to speak English with an authentic accent when I did pronunciation practice and read textbook materials aloud. However, when we were role-playing a textbook dialogue, some of my friends

made fun of me, saying “Why are you trying so hard to sound like an English native speaker?” Speaking native-like English was viewed negatively, while *katanaka* pronunciation seemed better at that time. I was at a loss, but since then, I stopped being serious about speaking with natural pronunciation.”

(2) 収集したエピソードデータから特定した, 「英語学習意欲を高める要因」は次のものである—(A) 英語の有用感, (B) (題材・活動などの)自分のニーズへの関連性の認知, (C) 価値を置いているもの(e.g., 英語による異文化コミュニケーション)に関する軽度の挫折体験, (D) 英語話者と交流したいという欲求, 英語文化への統合の欲求, (E) 成功体験の努力への帰属, (F) 外的な報酬・罰, (G) 明確な(短期)目標と効力期待, (H) 言語や題材内容に関する知的好奇心の喚起, (I) 達成感, (J) 向上感, (K) (他者との比較により得られる)自己価値感・優越感, (L) 身近なロールモデルの存在, (M) 他の学習者の英語・英語学習に対する肯定的な態度, (N) 教師の英語・英語学習への情熱, (O) 結果が予測できない状況での競争, (P) 周りの重要な他者からの期待の認知, (Q) 自己決定感, (R) 新規性・変化のある活動, (S) 自らの「参加」と「貢献」の感じられる授業形態。

同様に, 「意欲を低下させる要因」については次のものを抽出した—(A) 努力しても成果が伴わないこと(負の結果の能力への帰属), (B) テスト(特に受験)のためだけに勉強しているという感覚, (C) 学習内容の有用性への疑問, (D) 課題に対する自己効力感の喪失, (E) 外的報酬の消失, (F) 他者による英語学習の押しつけの認知, (G) 教師の英語能力・英語指導能力に対する疑念, (H) 教師の人格に対する不信, (I) 自分の英語能力に対する劣等感, (J) 周りの学習者の英語・英語学習に対する否定的態度, (K) 新規性や変化のない授業形態, (L) 「参加している」という意識の欠如。

(3) 開発した, 英語教師教育の一環としての「英語学習意欲」単元の概要は次の通りである。(この教師教育の単元内容自体が研究成果の一部である。)

単元のねらいは, ① (i) 関連のエピソードを分析する, (ii) 他の受講生と分析を共有する, (iii) 関連の理論的概念を理解し, それを援用してエピソードを再度読み解くことを通して英語学習意欲に関する理解を深める, ② (将来的に ALT 等と) motivation というテーマについて, より幅広く奥行きのある議論を英語でできるようにする, の2点である。

この「英語学習意欲」単元で用いる資料として、前述の英語学習意欲エピソードに加えて、上記で示した要因を整理してまとめた「英語学習意欲を高める／低下させる要因」の表を作成した。以下はその一部である。なお、受講生の思考を促進するために、表の一部は空欄にして（例えば、以下の (C)）、後に回答を示すようにしている。

表 1. 「英語学習意欲を高める要因」を整理した表（一部）

意欲を高める要因	意欲が高まるとき
(A) 英語の有用感 (perception of the usefulness of the English language)	<ul style="list-style-type: none"> ・英語が世界で広く使われているのを実感できたとき ・英語を学ぶことで自分の世界の広がるのが分かったとき ・学校で習った英語が外国人と話すとき役に立ったとき ・海外旅行などに行ったときに英語は役に立ちそうと実感できるとき ・英語は将来の進路のために必要であると感じられるとき ・知りたい情報を得るために英語が必要だと感じるとき
(B) (題材・活動などの) 自分のニーズへの関連性の認知 (perception of personal relevance of learning contents and activities)	<ul style="list-style-type: none"> ・学んでいる内容が自分の進路、ニーズなどに関連があると感じられるとき ・自分の専門に関係する題材の英文を読んでいるとき ・授業での活動に、将来行うであろう活動の「リハーサル」的な意味合いを感じる時
(C) <空欄>	<ul style="list-style-type: none"> ・非日本人と英語コミュニケーションを行なう機会があったがうまくいかなかったとき ・テストの点数が悪かったとき
(D) 英語話者と交流したいという欲求あるいは英語文化へ統合の欲求	<ul style="list-style-type: none"> ・英語話者や英語文化にあこがれを感じる時 (単に異文化コミュニケーションや異文化に興味があることとは区別される)
<以下省略>	<以下省略>

開発した「英語学習意欲」の単元は2授業時間からなり、次の①～⑦の要素から構成されている。

- ① テーマへの導入 最初に 4～5 人グループを作る。授業担当者が簡単な背景説明 (学習意欲に関する最近の話題、意欲と習得の関係、調査に関する基本情報) を行う。
- ② 英語学習意欲向上に関するエピソードの検討 (A) 意欲向上に関するエピソードについて、グループで一人1つずつコメント (宿題として課したもの) を英語で発表していく。一人3つコメントを考えてきているので、3周することになる。(B) 授業担当者がいくつかのエピソードを選び英語で解説を行う。
- ③ 意欲を高める要因の考察 (A) 「英語学習意欲を高める要因」の資料を配布し、受講生はそれに目を通す。この資料においては7つの要因の名称が空欄になっており、受講生はそれが何であるかをまず自分で考えてみる。(B) 授業担当者が要因名の選択肢をスライドで提示し、受講生はそれぞれの空欄がどれに対応するのかを確認する (=Which is which?)。(C) 最も重要だと思う3つの要因 (ただし「英語の有用感」は除く) を選択し、グループで意見交換を行う。この問いには「正解」がある訳ではない。重要と思う要因を選択するために何度も資料を読み直したり、他の受講生の見解を聞いたりする過程で、意欲を高める要因に対する理解を深めることをねらいとした活動である。
- ④ 意欲低下に関するエピソードの分析 (A) グループを組み替え、学習意欲低下に関するエピソードを対象として、コメントの発表と共有を行う。(B) 授業担当者がいくつかのエピソードを選び解説を行う。
- ⑤ 意欲を低下させる要因の考察 「英語学習意欲を低下させる要因」について、上記③と同じステップを踏み活動を行う。
- ⑥ 学習意欲に関する指摘の吟味 学習意欲に関する10の指摘 (e.g., 対象に憧れ続ける情熱、基礎に降りていく学び、ロールモデル効果と自己効力感などに関するもの) をまとめた資料を読み、その内から各自3つを選び、グループ内でコメントを発表し合う。
- ⑦ 学習意欲を高める方略についての検討 「意欲を高めるための方略 (motivational strategies)」に関する引用 (33の提案) を読み、その中からいくつかを選んでグループで意見交換を行う。

全体として、経験 (具体的なエピソード)

の吟味→理論化（抽象化）という流れで単元を構成しており、この展開は次のような考えに基づいている。まず、脱文脈化された理論的知識を最初から与えるよりも、具体的体験について省察したり、省察を他者と交流してみた後に理論と関連づけた方が、理論的知識がより納得感を持って捉えられるはずである。また、具体的な経験エピソードを単に数多く読むだけでは、個々の経験が相互関連性をもたずに組織化されない場合も多い。より抽象化された「英語学習意欲を高める／低下させる要因」について考察することで、記述された具体的経験、使われた文言の背後にある本質的なものへの気づきが促され、省察が深まると考えられる。

その他の指導上の工夫として、(i) 受講生の主体的参加と活発な思考を奨励するために、構造化されたグループ学習を中心に据え、授業担当者による解説で補充する、(ii) 多様な視点に触れさせるためにグループの再編成を単元内に何度か行う、(iii) 使用言語について、準備を伴う部分は英語で、即興で行う部分は日本語でという具合に使い分ける、(iv) ポイントを簡潔にまとめた資料の有効活用を通して専門的知識の提供を効率的に行う、などがあげられる。

(4) 構想した「英語学習意欲」単元は 2012 年度に実施し、様々な観点から評価を行った。評価データは、(i) 授業の全体的な評価、(ii) 授業形態・方法、(iii) 使用言語、(iv) 各活動の有用性、(v) 英語による活動の困難さの原因、(vi) 改善への提案、(vii) その他感想などに関する質問への回答から構成されている。

この内、(iv) 各活動の有用性については、まず 5 段階評定尺度（「1」＝「全く有用ではなかった」～「5」＝「大変有用であった」）を用いて受講生に評価を求めた。結果は次の通りである。

表 2. 単元を構成する各活動の有用性

	1	2	3	4	5
(A) 3つのエピソードを選び、コメントを考え発表したこと	--	--	1	15	5
(B) 同じグループの受講生によるコメント	--	--	1	9	11
(C) エピソードに関する担当教員による解説	--	--	--	5	16
(D) 「意欲を高める／低下させる要因」の考察	--	--	--	2	19
(E) 学習意欲について	--	--	2	12	7

ての専門家の見解					
(F) 「意欲を高める方略」に関する意見	--	--	4	10	7

結果は、おおよそ[4][5]に回答が集まるものとなっている。特に、「意欲を高める／低下させる要因」の考察(表 2 の D)については、ほとんどの受講生 (n=19) が「5」を選択しており、その有用性の認識は、次のような自由記述回答にも見てとることができる—「具体例はイメージしやすいが、理論的にまとめられた方が理解しやすいところもあった。理論で理解していれば、新たなエピソードに出会ったときにも見えるものが違うと思った。」この活動は、エピソードの間に隠れた関連性に気づいたり、記述された体験の奥にある意味を理解したりするきっかけになり、省察のレベルを向上させたと考えられる。また、グループ活動の中で扱えるエピソードは限定的であったことも関係してか、「意欲を高める／低下させる要因が思ったより多くのカテゴリーに分類できることは興味深かった。自分だけで考えたとき、そんなに何パターンも思いつかなかったが、理論的に考察したとき、本当に細かく分類されていて驚いた。」などの、意欲を高める要因の包括的な扱いを評価する回答も見られた。具体的経験の考察をまず行った上で理論的概念を学ぶという単元構成に関しても、「事前に自分たちでしっかりデータを読んで、コメントも考えてきているので、後で詳しく説明された時よく理解できた。」などの回答が示すように、その意図は理解されているようである。

一方で、(vi) 改善への提案に関する自由記述回答から、いくつかの課題も明らかになった。例えば、(A) 英語使用がもたらす制約・困難さ—英語教師教育の一環のプログラムであり、目標 2 として「将来的に ALT などともこのテーマについて英語で意味ある議論ができるようにする」を設定したため、エピソードについてコメントを共有・交流するという部分は英語で行ったのであるが、これが深い省察を妨げた可能性がある、(B) 「学びの持続性」—本プログラムにより受講生の英語学習意欲に関する認識は深まったと言えるが、この認識の変化が持続するかどうか、(C) 「正解」を性急に引き出すことの危険性—受講生が安易に単純な「公式化（～すれば意欲は高まる）」を行う傾向にあること、などである。

(5) 残った課題

本科研費研究にはいくつかの課題が残っている。1 つは、特定した「英語学習意欲を高める／低下させる要因」に関する、カテゴリー間の内容重複、階層関係の不十分な整理、

重要な要因の未認定などの問題であり，その再構成や精緻化はこれ以後も取り組まなければならない。また，本研究で開発した資料やプログラムは，現職英語教員研修や ALT 研修においても有効であると考えられる。実際に，ALT 研修においても本研究の成果を活用して講座を実施した実績はあるのであるが，その評価を行い，成果と課題を論文という形で纏めるところまではできていない。引き続き取り組むこととしたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 池野修，英語教師教育における英語学習体験の省察—「学習意欲」を対象テーマとして—，『四国英語教育学会紀要』，査読有，33 巻，2013，11-22

[学会発表] (計 2 件)

- ① 池野修，Use of motivation episodes in teacher education，全国語学教師学会 (JALT) 第 39 回国際大会，2013 年 10 月 27 日，神戸国際会議場
- ② 池野修，英語教師教育における英語学習体験の省察—「学習意欲」を対象テーマとして—，全国英語教育学会愛知研究大会，2012 年 8 月 4 日，愛知学院大学

[その他]

「英語教師教育における英語学習意欲エピソードの活用」マニュアル

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池野修 (IKENO, Osamu)

愛媛大学教育学部・教授

研究者番号：70294775